

第二十五回 玄和全国競書大会優秀作品



清水 紅華

審査所感

十一月二十四日(日)第二十五回全国競書大会の審査会が玄和文化院にて行われた。当日は快晴で列島各地、イベントなど華やいだ雰囲気の中、審査会場では、使命感を持った審査員の先生方とスタッフのご協力のおかげで、和やかな中にも厳正なる審査が進められた。

審査会では、審査員が一般部と学生部に分かれて一、二次審査を行い(一般半紙部は全員で審査)、三次審査では一人、一点から三点までの持ち点で審査を行い、全員の合計点で各賞が決定されていた。今年も例年同様、力作が多く審査員を大いに悩ませた。

先ずは学生部から。低学年は伸び伸びと紙面いっぱい書かれた作品が多く、中でも元気があり、子供らしい作品が好まれていたように感じられた。小学生の高学年から中学生になってくると、字形が良いのは言うまでもなく、線の伸びやかさや強さ、そして基本点画のしつかりとしている作品が高評価を得ていたようである。

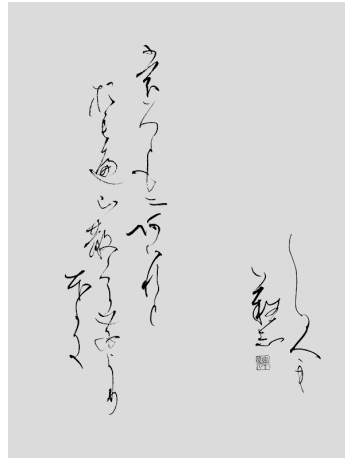
高校生は臨書作品から自由作品と幅広く集まり、その中には高校生が書いたとは思えないほど高度な筆捌きで、一般部の作品にも引けを取らないハイレベルな作品もあり、審査員を唖らせていた。今後が楽しみである。

次は一般、半紙部から。小さな限られた紙面の中で、二文字の漢字作品から漢字仮名交じり書、仮名作品と多種多様な作品が集まった。今年も例年以上に仮名作品のレベルが高く、高評価を得ていた。

— 玄和書道会賞 —



三井 花恩(高二)



菅井 花梨



村山 美月(小二)



岡野 璃音(小六)



古谷 日花(中三)

例年感じることだが、一般部、特に半紙部に出品される場合、もう少し撰文にも気を配って頂きたいと思う。五文字句を書くのであれば、漢詩(五言律詩)の一節であっても意味の通る一節を選んで頂きたい。一つの作品として作り上げているのであれば尚更である。

次に条幅部について。二、三行を中心とした行草連綿作品、所謂「春浦調」の、ハイレベルな作品が例年同様、多数集まり、また、近年では、普段勉強されている古典をしっかりと消化し、ご自身の作品に取り入れた傲書的な作品も増えてきている。今大会では、そのような自分らしさを追及された作品も高評価され、上位の賞になられていた。常日頃からの鍛錬の賜物だろう。

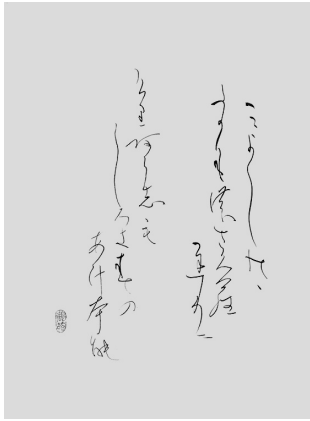
年々、師風を追及するだけでなく、そこに古典というスパイスを加え、「自分の書」「自分らしい書」を探求されている作品が増えてきている。このような傾向は、他の出品者の方々にも影響を与え、全体のレベルアップにも繋がるだろう。何しろ、私も刺激を受けた一人なのだから。

審査に携わる者として、出品される作品のレベルが年々向上していく以上、自分自身も負けないよう日々努力鍛錬し、全てにおいてレベルアップしていかないといけないと改めて感じさせられた、そんな審査会であった。

次回では、どのような作品に出会えるか期待し、今から楽しみに待ちたいと思う。

第二十五回 玄和全国競書大会
審査委員長 細谷 春誠

— 春 浦 賞 —



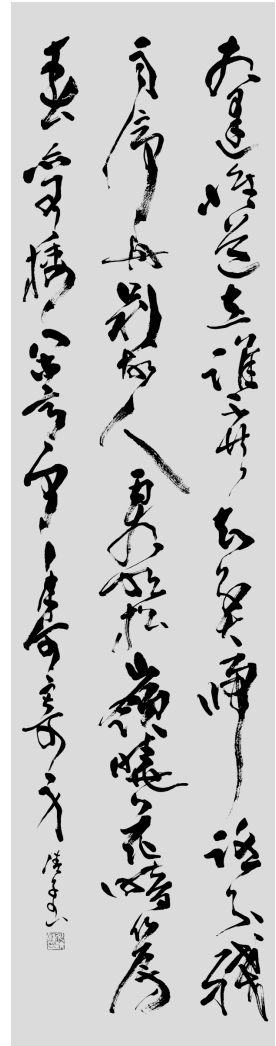
佐々木鶴苑



公野 珠月(高三)



山口 歳子



市川 清子



須田 結心(小三)



小林 香澄(小五)



佐藤 綾(中二)



ケレハー加央里



洪 璃雅(高一)



石原 香蘭



北原加枝子



神保 祐満(小一)



神保 英寿(小四)



山本 果那(中一)